

よってくびれ部を確認したことからあらためて前方後円墳であったと知られるにいたった。規模は後円部直径が一七[㍻]と推測されるほかは不明である。現存する出土品は乏しいが、出土した埴輪などから年代が推測された(吉富町教委「楡生山古墳」『吉富町文化財調査報告書』第三集、一九九一)。これら三基の古墳は直系の三代の墳墓とは考えられないが、前方後円墳を継続して築造できる有力な集団が地域内に存在したことを示す。能満寺三号墳の眼下には弥生後期の巨大な環濠集落が存在したことが推測されており、古墳出現以前から有力な集団が存在していた。

また、宇佐市赤塚古墳の周辺では近接して免ヶ平古墳(五〇[㍻])・角房古墳(四六[㍻])・車坂古墳(六〇[㍻])・福勝寺古墳(八〇[㍻])などが継続し、鶴見古墳(三〇[㍻])が時期的にやや孤立するようであるが六世紀前半まで前方後円墳が造られた。川部・高森古墳群と呼ばれて「菟狭^さ国造」一族の墓域と目されている(図2-108、古墳の規模は大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『図録うさ・くにさきの歴史と文化』一九八一、古墳の編年は真野和夫「九州―東部(大分)」『古墳時代の研究』一〇。地域の古墳Ⅰ 西日本、一九九〇による)。この古墳群の周辺部でも弥生時代前期から後期にいたる長期間にわたって環濠を伴う地域の中核的な集落が継続していたことが判明している。豊前南部の拠点としてヤマト政権に重要視され、かつそれに応える

だけの能力を備えた集団であった。このように長期にわたって同一と思われる集団が権力を維持した例は九州でも多くないとはいえ、石塚山古墳に後続する有力な古墳が全く見られない豊前北部のあり方は山国川流域に比べても異様といってよい。この理由には、石塚山古墳の築造に対して地域社会からの労働力の動員は当然あったとしても、それが在地勢力によって主体的に造られたモニュメントではなかったことを予想させる。

前期後半には玄界灘に面した二丈町に一貴山銚子塚古墳が造られる。現状で全長一〇三[㍻]を測る玄界灘沿岸地域最大級の前方後円墳で、昭和二十五年(一九五〇)に未盗掘の埋葬部の竪穴式石室が発掘された。石室は長さ三・四[㍻]、幅一・四[㍻]で狭長なものではないが、舶載鏡二枚、仿製三角縁神獸鏡八枚をはじめ、刀剣類二七口や鉄鏃・玉類が出土している。ヤマト政権に直結する古墳としては第二世代の内容をもち、かつ副葬遺物の内容は九州内で突出している。北部九州全体で見した場合、石塚山古墳から一貴山銚子塚古墳へ盟主権が移動したと見ることにも突飛な発想とはいえないのである。ヤマト政権はこの段階で玄界灘沿岸地域をあらためて掌握したものであろう。

二 九州古墳文化の地域性

朝鮮半島への ヤマト政権が朝鮮半島への介入を開始した
進出と北部九州 中期初めの畿内系遺物の象徴ともいふべき

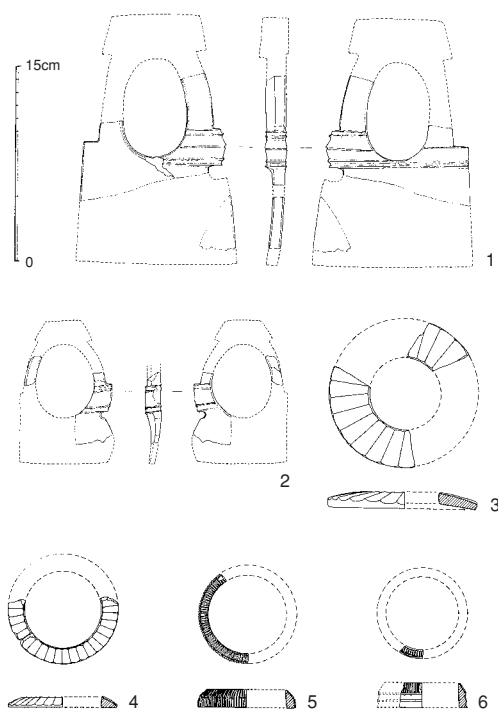


図2—109 沖出古墳出土の碧玉製腕飾類
(報告書より)
1・2 鍬形石 3 車輪石 4・5 石釧

碧玉製腕飾類は、九州ではとても珍しい。稲築町沖出古墳（前方後円墳、約七〇メートル）は筑後地方以外では珍しい舟形石棺を竪穴式石室に納めた古墳で、盗掘を受けていたものの鍬形石・車輪石・石釧の三種の副葬が確認された九州唯一の古墳である（稲築町教委「沖出古墳」『稲築町文化財調査報告書』第二集、一九八九）。この三種の碧玉製腕飾類を出土した遺跡が九州に今ひとつある。宗像市沖ノ島の祭祀遺跡である。四世紀後半から五世紀はじめに位置づけられるこの沖出古墳に葬られた首長とヤマト政権の結びつきは、該期の九州で最も強かったといっても過言ではない。



図2—110 旧宗像群津屋崎町の古墳群
(津屋崎町教委「新原・奴山古墳群」『津屋崎町文化財調査報告書』第6集、1989より)

これにやや遅れて、北部九州の古墳のあり方にも変化が見られた。一つは宗像地域海岸部での大規模な古墳群の出現、そして筑後川中流域に現れる吉井町月岡古墳つきのおかの存在である。

宗像地域では海岸に面した旧玄海町・旧津屋崎町域に三群に分かれる二七基の前方後円墳が確認され、いずれもが五・六世紀代の築造と考えられている。短期間での密集度は全国的にも屈指のものであろう。有力な古墳の初現は、初期の須恵器や多量の鉄製品をもち、箱式石棺を埋葬部とする奴山正園古墳（旧奴山五号墳、円墳、三三ト）などの円墳である。最大の古墳は全長九七メートルの勝浦峯ノ畑古墳（津屋崎四一号・勝浦一四号）で、石室内に天井を支えるように二本の石柱が据えられた特異な古式横穴式石室を主体部とする。舶載・仿製の七枚の銅鏡のほか四〇口以上の刀剣などが出土して五世紀後半に考えられている（福岡県教委「新原・奴山古墳群」『福岡県文化財調査報告書』第五四集、一九七七）。そして古墳群の掉尾を飾るのは七世紀前半の宮地嶽古墳である。津屋崎古墳群は現在でも宗像大社を奉祭する地域にあり、海岸部に集中する前方後円墳群は沖ノ島祭祀と深い関わりを持つと考えてよい。宗像地域の四世紀代の主要古墳は釣川流域に可耕地をもつ内陸部の旧宗像市域に存在し、可耕地の乏しい海岸部ではまだ知られていない。古墳の分布状況から見た場合、五世紀代に内陸部と海岸部の勢力の逆転が起きるのである。沖ノ島での祭祀がはじまって間もなく、初期横

穴式石室が見られる唐津市・前原市付近の玄界灘西部にあった弥生時代以来の対外的拠点が、ヤマト政権の意思によって玄界灘東部へ移されたのである。

月岡古墳は筑後川中流域に位置する全長九五メートルの前方後円墳である。九州で数少ない長持形石棺を納めた竪穴式石室を主体部とし、金銅装を含む眉庇付冑八点、短甲八点のほか金銅製品（帯金具・馬具など）や銅鏡などの豊富な副葬品を出土した。

甲冑を多数副葬した古墳としては大阪府黒姫山古墳の二四領が最多であるが、月岡古墳の出土数は五指に入り、かつ四領以上の甲冑を出土した古墳としては畿内以外で唯一の例である。発掘が文化三年（一八〇六）と古く、散逸した遺物があつて全体が不明であるが、石棺や副葬品に見られるその内容は五世紀中葉のヤマト政権に直結するものと評価されている（小林行雄「中期古墳時代文化とその伝播」『古墳時代の研究』一九六二）。

この頃は独自の横口式家形石棺を埋葬部とする広川町石人山古墳など、後の筑紫君磐井につながる勢力が筑紫地域で台頭しつつあり、その牽制の意味があったともいわれる（福尾正彦「筑後月ノ岡古墳とその周辺」『森貞次郎先生古希記念古文化論集』下巻、一九八二）。筑後川は有明海を経て外洋に通じる。日田市で降りれば山国川を経て、水分峠を下れば大分川を経ていずれも瀬戸内海へも通じる。後のことであるが、唐・新羅連合軍と戦うために朝倉宮に入った斉明天王は、別府湾から筑後川に沿

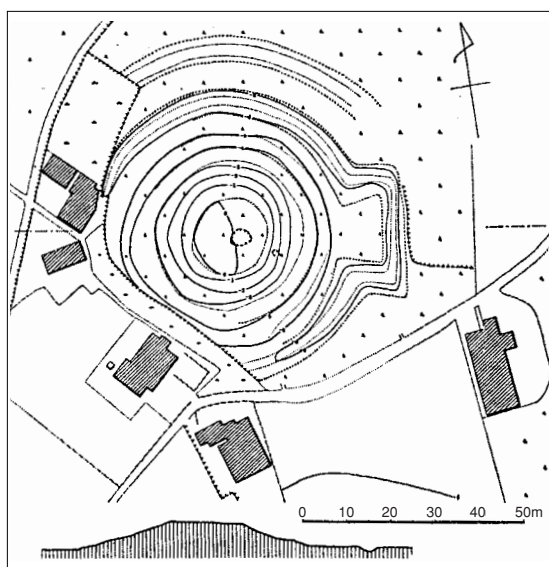


図2—111 行橋市石並古墳

(小田富士雄「福岡県石並前方後円墳」『九州考古学研究』1979より)

うルートを通った。関連して造られたと考えられる古代山城神龍石の一つは山国川下流の大平村にも築かれた。対朝鮮半島・対中国との硬軟を交えた交渉のためには北部九州を強固に抑える必要が強く意識されたことであろう。

稲童古墳群と 宇野慎敏によれば、五世紀代の京築地域では**居屋敷窯跡** 小円墳からの甲冑の出土が目立つという。犀川町長迫古墳・荻田町猪熊一号墳そして行橋市馬場代^{ばだい}二号墳・同稲童八・二一^二号墳などである(『古墳文化の変貌』『行橋市史』上巻、二〇〇四)。先述したように甲冑もまたヤマト政権から与えられたものであり、これらの古墳の被葬者も朝鮮半島と

の緊張関係の中で一定の関わりをもっていたのであろう。未調査の古墳が多く存在するために確定したものではないけれども、稲童付近の海岸部に三基が集中する点は注目してよい。四世紀代と考えられる稲童一五号墳もその一連の中に位置づけられるのかもしれない。稲童地区の古墳群は全長六八^八の帆立貝式前方後円墳である石並古墳を盟主とする(図2—111)。この古墳は時期を特定する遺物が公表されていないが、頂部が陥没することから堅穴系あるいは初期の横穴系の埋葬部と推測され、五世紀後半以前に築造されたものと思われる。先の甲冑を出土した古墳の被葬者たちを指揮した有力首長の墳墓であろう。

四〇五世紀代の京築地域の豪族の半島での行動は豊津町居屋敷窯跡の発見でも裏付けられた。居屋敷窯跡は行橋バイパス建設に伴って発見・調査された遺跡で、祓川によって開析された段丘法面に、六世紀後半の横穴墓群とともに掘り込まれていた。窯跡は前面を破壊されており、床面の残存長五^五、幅は一・二^二ほどで、窯尻(最奥部)は隅丸長方形に近くなる。そこからほぼ垂直に立ち上がって煙道部につながるが、煙出し付近は破壊されて詳細は不明である。焼成に失敗した不良品を廃棄する灰原はすでに失われていたが、窯跡内で完形の須恵器^{はろ}壺(壺の一種で、体部に穴をあけた酒器)や大型甕片を出土した(図2—112)。壺は口径九・四^四センチ、器高一四・一^一センチを測る。体部が球形に近く、口頸部が細く短い点に特徴を持つ。大型甕

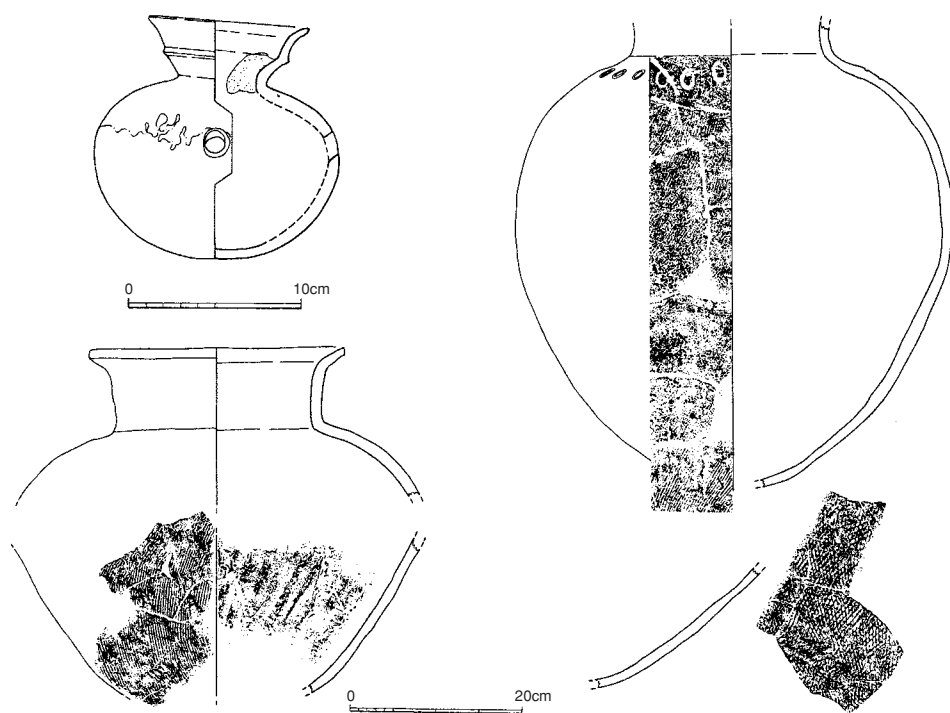


図2—112 豊津町居屋敷遺跡出土須恵器
(報告書より)

は頸部が直立して口縁部付近が強く外反し、口頸部に装飾は見られない。体部片では肩部に円形スタンプ文をもつものがあり、調整は外面を平行叩きあるいは細かい斜格子叩きで、内面は撫でて仕上げる。大型甕はいずれも土師質・軟質に焼かれていることから、大型品の焼成に失敗したのではないかと思われる。また、甕は焼成堅緻であるが、頸部内面に窯土が付着していて実際に使用されたものか疑問である。窯内から須恵質に焼かれた遺存品がまったくないことからみても、この甕は大型甕の焼成に失敗した後、窯を放棄する際のマツリに使用されたものではないかと考えられる（福岡県教委「居屋敷遺跡」『椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第六集、一九九六）。

この窯跡造った工人は当然のこととして朝鮮半島から渡ってきたはずで、その故地はまだ明らかにできないが、新しい技術を導入した主役は石並古墳の被葬者であった可能性がある。両者の距離は四〇を隔てるが、居屋敷遺跡に最も近い有力首長墓である。石並古墳が帆立貝式という形制をとることも、この被葬者がヤマト政権の強い影響下に置かれていたことを暗示している。更に、石並古墳周辺は可耕地に乏しいことから、在地性の乏しい勢力と言えるかもしれない。

また、同じように個性的な須恵器窯が筑前町（旧夜須町・三輪町）（小隈・八並・山隈窯跡）、筑紫野市（隈・西小田窯跡）で発見されている。特に、筑前町の窯跡で焼かれた製品は甘木市

古寺・池の上古墳墓群などで多く出土するとともに、比較的広い地域で出土し、一定程度の流通がなされていた。ここでは甘木市堤にある堤当正寺古墳（前方後円墳、七〇メートル）や同小田茶臼塚古墳（前方後円墳、五四メートル）、筑前町小隈古墳（前方後円墳、四四メートル）などが直接の原因となろう。堤当正寺古墳では前方部に造られた竪穴式石室から甲冑などが、小田茶臼塚古墳では初期の横穴式石室からやはり甲冑などが出土している（吉武孝礼・松尾宏「北部九州における渡来文化の様相」『第四六回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』一九九九）。

御所山古墳 と番塚古墳

御所山古墳は水をたたえた周濠をもつ九州屈指の古墳である。後円部の白庭神社社殿の下に横穴式石室が所在し、現在は見ることができないが、明治二十年に作成された記録と絵図が残されている。それによれば、石室は前方部に向かって開口する初期の板石積横穴式石室で、長さ四・七メートル、幅三メートルの長方形となり、高さが三メートルを測る大型石室である。石室奥壁に沿って二つの屍床（埋葬部）が置かれ、それも含めて石室の四周に一九枚の板石（石障）が立てられるといった特徴をもつ。銅鏡一枚や玉類・甲冑・馬具などが出土するが、盗掘のため内容は突出したものではない。石障は肥後地域の特色で、石室形態や埴輪から五世紀中ごろから後半に造

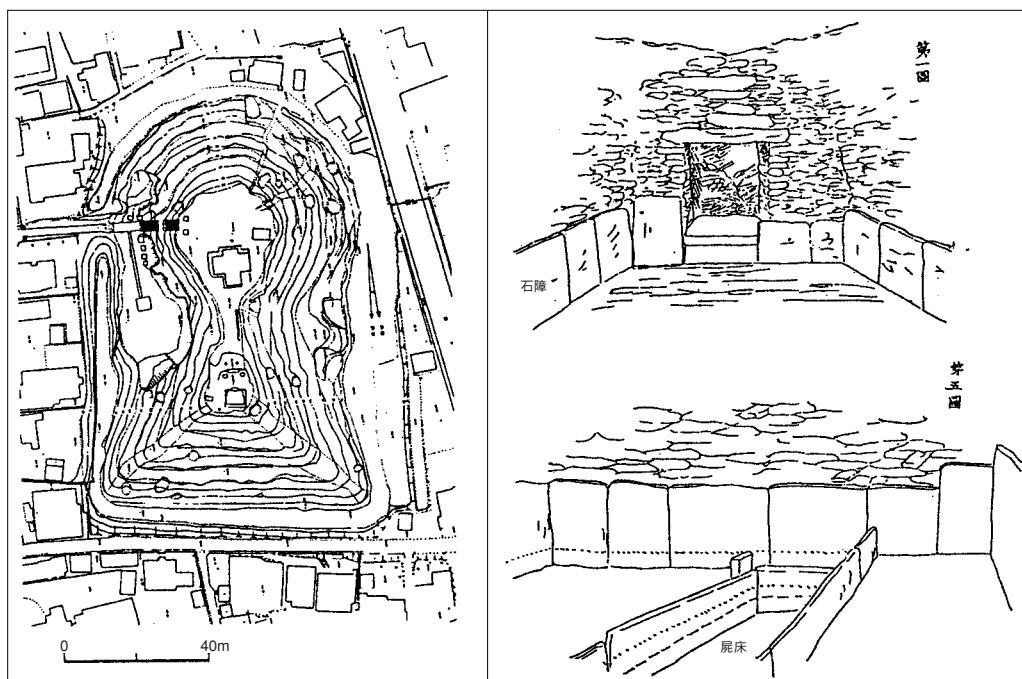


図2-113 荻田町御所山古墳の墳丘と石室スケッチ

られたとされている（荇田町教委『史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書』一九七六）。

これに後続するのがその北五〇〇メートルに位置する番塚古墳である。昭和三十四年（一九五九）、土取中に未盗掘の石室が発見されて九州大学による調査がなされ、その詳細は平成五年に『番塚古墳』（『荇田町文化財調査報告書』第二〇集）として刊行された。埋葬部は長さ三・六五メートル、幅一・五メートル、九六センチメートルの羽子板のような平面形態となり、高さが一・六メートル、九六センチメートルを測る比較的古式の横穴式石室であった。石室を構成する石材は御所山古墳のそれに比べて大きいものを使用している。未盗掘の石室から舶載神人歌舞画像鏡一枚、各種玉類、太刀・矛・鉄鏃などの武器、挂甲一領、胡録（ころく）という弓盛具、馬具や飾り金具といった金銅製品、木棺に使用された釘・鏃（かすがい）や蟾蜍（せんじよ）（ヒキガエル）形飾り金具や土器などの豊富な副葬品が出土した。五世紀末から六世紀初めに造られた番塚古墳は、現在は墳丘が失われているものの、全長五〇メートルほどの前方後円墳であったと復元されている。その豊かな質の高い副葬遺物は、倭の五王の時代に対外交渉に参画した有力な人物であったことを示す。そして、番塚古墳以前のこの地域の前方後円墳はいずれも海岸部に面して造られていて、周防灘を往来した人々に対して勢力を示威したところであろう。

この二古墳に行橋市石並古墳を加えた三基が五世紀代の豊前

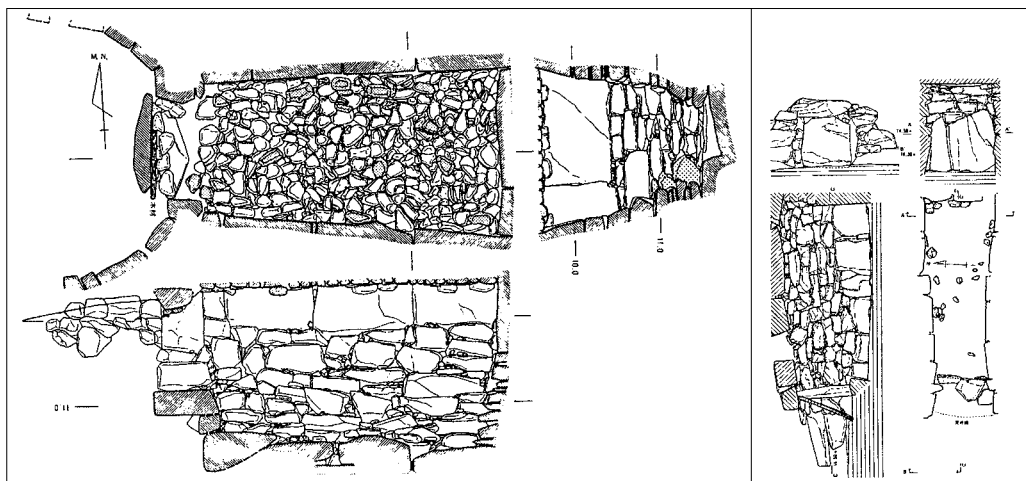


図2—114 首長墓（番塚古墳）と群集墓（松山5号墳）の主体部の違い（縮尺同一）
（荇田町教委「荇田町の文化遺産」『荇田町文化財調査報告書』第34集、2000より）

北部の首長墳である。これらを造った集団は、ヤマト政権にとって九州の門戸という地政学的位置のために重視された豪族であった。御所山古墳の被葬者は主体部構造からみて九州内陸部の勢力を後ろ盾に地域の盟主権を握ったものと思われる。しかし、両くびれ部に造出しを付すなどヤマト政権中枢部と同じ墳丘形態をとり、中央政権から孤立したものでは決してない。

五世紀代の小古墳は苅田町松山古墳群・百合ヶ丘古墳群・猪熊古墳群・岩屋古墳群や行橋市稲童古墳群・穴田古墳群・犀川町三ツ塚古墳群・古川古墳群、勝山町上久保古墳群が発掘調査された。いずれも単独で位置することなく一〇基前後が群集し、また、六世紀前半ごろまで継続するようである。苅田町・行橋市の古墳群はいずれも海岸部に近接し、大型古墳と同様の立地をとる。そして、勝山町や犀川町の内陸部にも古墳の分布が広まった。この時期の古墳は木棺直葬（木棺を直接埋納するもの）・小型竪穴式石室などの竪穴系の主体部、竪穴系横口式石室などのバラエティがあるが、おおむねこの順序で変化していく。五世紀後半代の須恵器を出土する古墳はほぼ竪穴系横口式石室をもつものである。

石人・石馬

筑・豊・火を勢力下においたとされる磐井の勢威は実際に考古学的に論証されるのである。か。早く昭和五十二年（一九七七）に森貞次郎は、岩戸山古墳を一、二世代遡ると考えられる筑後市石人山古墳の諸要素を検

討して、これを北部九州と中部九州を含めた地域にみられる土着性の強い複合文化の中心に位置する古墳と位置づけた。その要素とは、古式の横穴式石室、横口式家形石棺、同心円文・直弧文の彫刻（石棺・石障系の装飾古墳）、そして石人・石馬である（『古墳文化からみた磐井の反乱』『古代の地方史』一、一九七七）。その後の資料の追加や、研究の進展には目を見張るものがあるが、大局的に森の視点は現在も受け継がれている。

最近では石製表飾と呼ばれることが多い石人・石馬は、熊本県や福岡県南部を中心とする地域で用いられた。形象埴輪と共通する題材を、加工の容易な阿蘇熔結凝灰岩で作ったものの総称である。出土する古墳は五世紀初頭から六世紀にかか

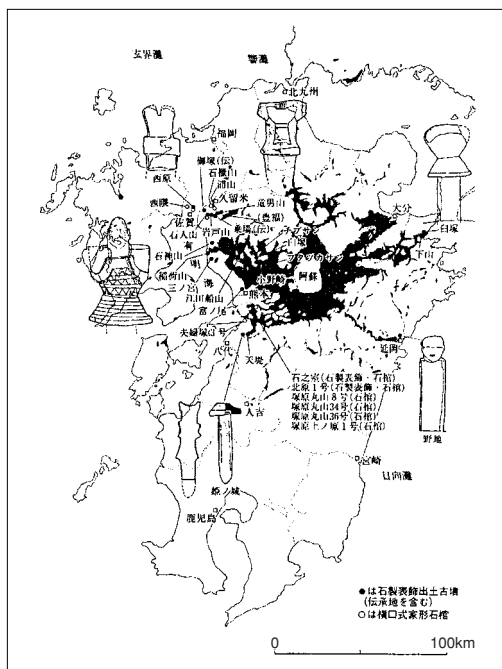


図2—115 石製表飾・横口式家形石棺と阿蘇熔結凝灰岩の分布（柳沢一男『九州古墳文化の展開』『新版古代の日本』③九州、1991より）

地域の代表的な古墳といわれる。その初現は大分県臼塚古墳の立体的に造られた短甲形とされ、形象埴輪の衰退とともに六世紀後葉には消えていく。

石人・石馬は通常一基の古墳にないし数点が使用されるようであるが、筑紫君磐井の墓といわれている福岡県八女市岩戸山古墳では数多くの遺品が出土している。前方部上の発掘調査では円筒埴輪列の内側に並べられていたと推測される状態で、^{ゆき}靫一・扁平石製品一・刀形四点が出土した。また、別区と呼ばれる造出状の部分からは、各種人物・刀・刀装具・盾・靫・衣笠・馬・鶏・水鳥・壺形などの各種が採集されている。これらのあり方は形象埴輪と同様な葬送儀礼に使用されていたことを推測させる。石人・石馬を出土する古墳には通常の埴輪も使用されていることから、特に石製品を古墳に樹立するという行為を共有することで首長間の紐帯を確認したのであろう（柳沢一男「石製表飾考」『東アジアの考古と歴史』下、一九八七）。

装飾古墳

装飾古墳といえは近年耳目を集めている奈良県キトラ古墳や高松塚古墳を想像するかもしれないが、これらは七世紀末から八世紀前半に造られた壁画古墳というべきで、図像から見ても明らかに大陸文化の影響を受けたものである。一方、これらとは別に、それ以前から我が国にも墓室を飾る文化が存在した。その装飾される部位によって、石棺系・石障系・壁画系・横穴系に分類するのが普通である（小

林行雄『装飾古墳』一九六四）。

四世紀代から五世紀前半にかけての大阪府安福寺所在の割竹形石棺や福井県足羽山^{あすわやま}にある舟形石棺の一部に直弧文や円文などを線刻した例がみられるが、決して一般化したものではなかった。しかし、五世紀前半ないし中ごろの福岡県広川町石人山古墳や久留米市浦山古墳などの横口式家形石棺の天井部や内面に浮き彫り・線刻された直弧文は、その後、横穴式石室内の装飾や区画などに使用された石障に刻まれることとなり、筑後・肥後地域で一定の広がりをもった。五世紀後半の熊本県井寺古墳では線刻された直弧文・円文を赤・白・青・緑で彩色し、五世紀末とされる同県千金甲^{せごんこう}一号墳では直弧文を省略した対角線文（×字形）と円文を刻んで赤・青・黄で着色する。直弧文は緊縛の様を抽象化したといわれ、呪術的な意味が考えられている。円文は鏡を表現したものと考えられ、両者ともに死者の魂を封じ込め、邪悪なものから守るという古墳時代前期以来の葬送観念を新たな形で表現したものともいえる。

壁画系とは横穴式石室の壁画そのものに彩色あるいは線刻で幾何学文様や絵画を描いたもので、先の彩色が施された石障系装飾古墳が発展したものと位置付けられるが、画材は円文・三角形文といった抽象的なものに加えて、より具体的な人物・動物や弓矢・靫・船などの器物を表現するものが現れる。福岡県うきは市日岡古墳^{ひのおか}はこの種の古墳の嚆矢といわれる六世紀前半

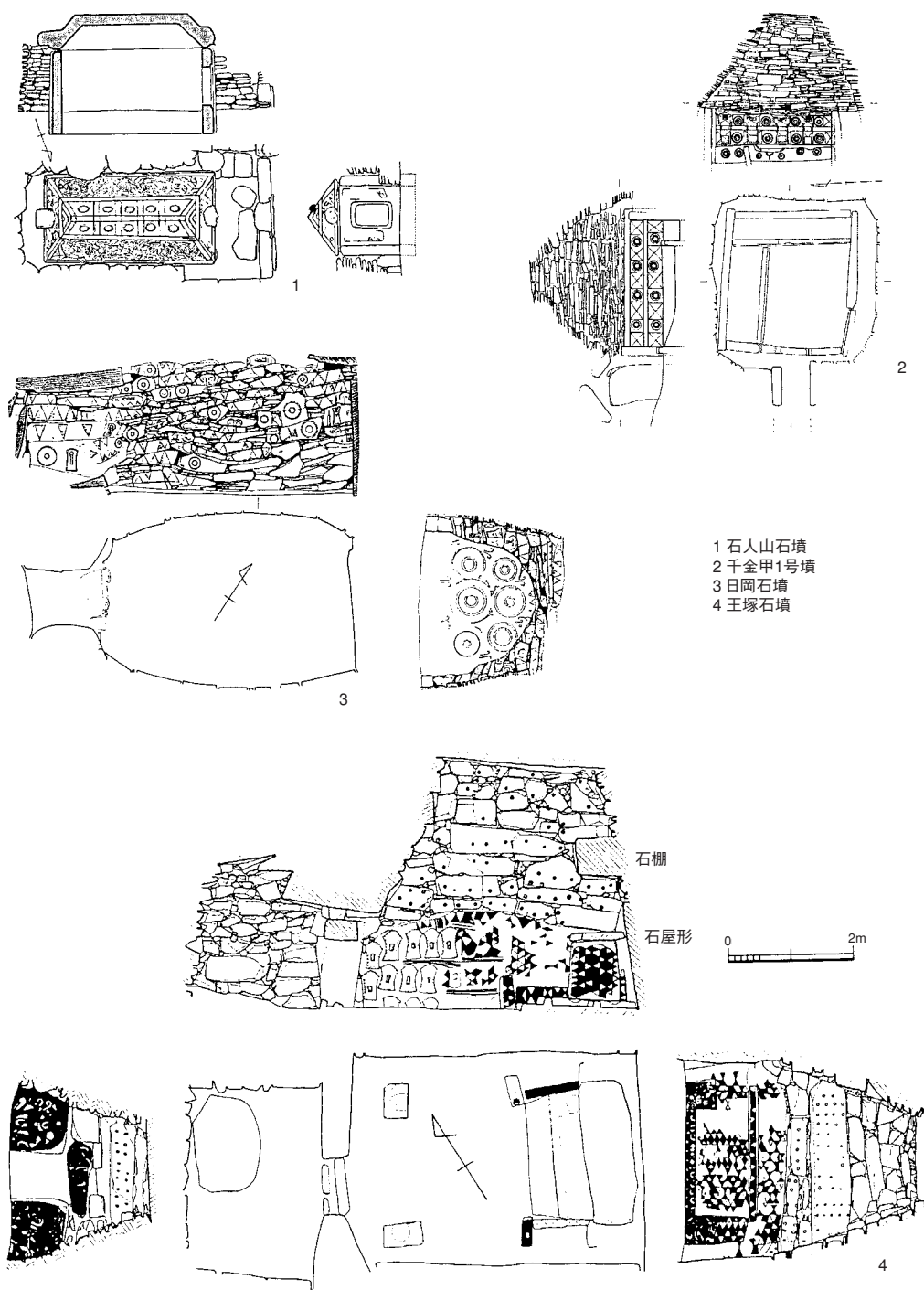


図2-116 装飾古墳
(国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』1993より作成)

の前方後円墳（約七〇メートル）で、横穴式石室奥壁に使用された巨石に大型の同心円文、その間に小さな蕨手文を置き、巨石の左右・上方に積み上げられた割石にも連続三角文や同心円文・蕨手文、左右両側壁には連続三角文を多用して、やはり同心円文・蕨手文などの抽象的な図文や小さな靫・太刀・魚・馬・船などそれまでみられなかった画材を取り入れている。この日岡古墳の位置する筑後川流域では日田市から久留米市にかけて四三基の装飾古墳が確認されているといい、すでに破壊されたものも多いと聞く。首長墓のみならず、直径十数メートルの小規模古墳にも装飾が施されるなど異彩を放っている。

福岡県桂川町王塚古墳は装飾古墳の白眉といわれる。全長約八六メートルの遠賀川流域最大の前方後円墳で、全長六・五メートルの複室構造の横穴式石室を主体部とし、前室の両側壁を除いた全面に赤・黄・緑・黒・白の五色で彩色・壁画が施されている。三角形文・蕨手文・双脚輪状文・楯・靫・弓・騎馬の人物などの幾何学的文様や具象画が石室下半に所狭しと描かれ、上半も全面が赤色に塗られたうえに星を表すと思われる珠文を散らしている。福岡県若宮町竹原古墳も物語的な壁画や大陸思想の四神図を描くことで著名であるが、これらは点的に所在する装飾古墳で、筑後川流域でみられるような継続的な、重層的な構造はみられず、一時的に花開いた文化現象といってもよい。

装飾古墳の展開で中心的な位置を占めるのは熊本県から筑後

川流域にいたる地域で、石屋形・石棚といった特色ある石室構造とともに、死者を守る彩色壁画の発信地であった。なお、壁画系装飾古墳は七世紀には鳥取県梶山古墳や茨城県虎塚古墳などの九州以外の地でも点的に築造され、画材にも円文・三角形文・人物や動物など共通点が多いが、その解釈については定見がない。

横穴系は横穴墓の内側や外壁に線刻・彩色を施すもので、熊本・福岡県下のみならず、関東・東北地方の太平洋側で非常に顕著となる。これもその理由について有力な説はない。

主として六・七世紀代に日本列島の西と東で盛行した古墳に装飾を施す風習が、古墳文化を常に主導した畿内地方でほとんどみられないことは非常に奇異なことである。時の政権に対して異を唱え切れない僻遠の勢力が、反中央の姿勢を第三者に悟られない領域で示したものであるうか（国立歴史民俗博物館『装飾古墳の世界』一九九三）。具象的な文様が成立する日岡古墳はほぼ筑紫君磐井の乱の時期に造られた古墳である。

石製表飾にしても装飾古墳にしても、筑後から肥にかけて集中する文化現象で、豊後に散在するとはいえ、豊への影響は大きくない。磐井と豊との密接な関係は未だ証明されていないといえる。